国語解答

一 問一 a…4 b…1
問二 ア…3 イ…4 問三 1
問四 3 問五 4 問六 2
問七 2 問八 3 問九 4
問十 3

二 問一 a…3 b…3 c…2
問二 ア…4 イ…1 問三 3
問四 2 問五 4 問六 1
問七 3 問八 1 問九 4
問十 3

三 問一 a…1 b…2 問二 3
問三 2 問四 4 問五 4

四 問一 ア…2 イ…4 問二 2
問三 3 問四 2 問五 2
問六 A…3 B…1

一〔論説文の読解—芸術・文学・言語学的分野—芸術〕出典；茂木健一郎『今，ここからすべての場所へ』「子供の領分を守り抜く意志」。

≪本文の概要≫私たちは，生まれたばかりのときから，さまざまなことを学ぶ。学ぶということは，現実に汚れ，世間の常識に染まることと裏腹の関係である。それでも私たちは，人生の新たなステージに立つたびに，生まれたばかりのときと同じような新鮮な期待に満ちあふれる。私たちは，人生の節目に新しい環境に飛び込むとき，その空白に向き合う喜びを感じる。真っ白な希望をもって始まったはずの新しい空白のステージも，やがてありふれた現実に満たされていくことは，人生最大の不幸の一つである。偉大な芸術が人類に与える恩寵は，その空白に対する希望が，具体的に満たされた後でも生き続けるという点にある。そこには，一瞬ごとに充足される喜びが，永遠に存在する。美しいものに囲まれていると，心が荒れることはないという。この世の汚れを知らない幼子の微笑みの中には，形而上学的な何ものかに通じる力がある。どんな芸術作品も，過去の記憶や体験を思い起こす中で生まれてくる。だから，作品には人が顕れるといえ，美しい作品を作った人は，芯まで美が詰まっていると考えられる。

問一＜漢字＞a.「遭遇」と書く。1は「喪失」，2は「浴槽」，3は「服装」。　b.「未踏」と書く。2は「到達」，3は「哀悼」，4は「該当」。

問二＜接続語＞ア.仮に，全ての大人が陳腐な素材でばかり魂を満たすのだとすると，この世は実につまらない場所になってしまうだろう。　イ.創造は，例外的事象ではなく，どちらかというと逆に人生の時々刻々に満ちた事象である。

問三＜文脈＞私たちは，「人生の新たなステージに入り込むたびに」，生まれたばかりのときと「同質の白く透明な光」を目の前に見るような気がして，「リアリティ」を感じる。そのような「空白」の中にこそ，生きる実感はあり，私たちは，「人生の節目に新しい環境に飛び込むたびに」，その「空白」に向き合う喜びを感じる。

問四＜文の組み立て＞「日に」は，「持たなかった」にかかる連用修飾語である。

問五＜指示語＞学習しながら世間の常識を忘れるということを，生涯の最後まで貫くことは，めったにないことである。

問六＜表現＞人生の新たなステージに立つたびに，私たちは，生まれたばかりのときと同じような

「空白」が自分の目の前に広がっているように感じる。そして，そのときは，だれでも「不安の入り交じった希望」をもち，「その空白に向き合う喜びに心を震わせる」のであり，新しい事態に出会うたびに，「『今度こそは違うはずだ！』と胸を弾ませ」，そこに「真白き希望」をもつ。

問七＜文章内容＞「全ての子供は感受性の天才であ」り，「どんなことも当たり前のこととしては受け止めない」のに，せっかく「真白き希望を持って始まったはずの新しいステージ」に「下手なものを満たしてしま」い，「陳腐な大人」になってしまうことは，実に「もったいないこと」である。

問八＜文章内容＞全ての創造物は，「人生の時々刻々に満ちて」いて，「何か新しいものを生み出すということは，過去の記憶を思い起こすこと」であり，「作品を紡ぐ素材は，自らの体験のアーカイヴの中にある」ものである。だから，無垢な子どものように「世間の常識」と「現実に汚れ」ないままで創造することは，どんな天才にもできないのであって，成長過程の人間に比べれば，その創造性は，とうてい及ばない。

問九＜文章内容＞「作品を紡ぐ素材は，自らの体験のアーカイヴの中にある」からこそ，作品に人が表れる。だから，「美しい作品をつくった人」は，その人の内面や体験してきたこと全てが美しいと考えられる。

問十＜要旨＞私たちは，人生の新しいステージに立つたびに，期待に満ちて新たな空白に立ち向かうが，えてしてそれは常識的で陳腐なもので満たされてしまい，「ほろ苦い失意」を覚える。だが，偉大な芸術は，目の前の空白が満たされたあとも希望が生き続け，一瞬ごとに充足される喜びが無限に並べられていく点において，人類にとっての最大の恩寵である。

二 〔小説の読解〕出典；石田衣良『夕日へ続く道』。

問一＜漢字＞a．「沿う」と書き，音読みは「沿道」などの「エン」。「規準」は「キジュン」，「脅威」は「キョウイ」，「炎症」は「エンショウ」，「勧誘」は「カンユウ」。　b．「床」と書き，音読みは「温床」などの「ショウ」。「報酬」は「ホウシュウ」，「払底」は「フッテイ」，「補償」は「ホショウ」，「赴任」は「フニン」。　c．「砕けた」と書き，音読みは「粉砕」などの「サイ」。「崩落」は「ホウラク」，「詳細」は「ショウサイ」，「粉末」は「フンマツ」，「破壊」は「ハカイ」。

問二＜語句＞ア．意外な事に出会って驚きあきれる，という意味。　イ．相手の勢いに負ける，気分的に圧倒される，という意味。

問三＜文章内容＞源ジイは，前日までのリハビリでは「手すりにもたれて立っているのが精いっぱいのよう」で，左足は震え，とても「勝ち目があるようには見えなかった」し，決戦の金曜日には体調不良でリハビリ訓練を休んでいた。だから，雄吾は，「もう賭けをやるまでもない」と思い，賭けなどどうでもいいから，源ジイに無理せずゆっくり療養してほしい，と思った。

問四＜心情＞源ジイは，賭けをしてもとても「勝ち目があるようには見えな」い状態だったので，雄吾は，賭けを実行すると言って車椅子で病室を出ようとした源ジイに驚き，「ほんとうにやるの」と信じられない思いで言った。

問五＜文章内容＞源ジイとの賭けは，「病室をでてから便所までの二十メートル」ということになっていた。半分ほどきたところで，源ジイは立ち止まり，休みながら倒れそうな体勢を立て直して，「最後の十メートルをすすむ」ために，「また足をひきずり，夕日の廊下を歩き始めた」のである。

問六＜状況＞賭けを始めたのは「午後五時」で，「廊下の先にある窓のなかに夕日が沈んでいく」の

が見えていた。賭けが終わるころは，それからいくらか時間がたって，夕日は半分ほど地平線に沈んでいた。

問七＜心情＞雄吾は，自分に「人間，どんなにバカらしくても，やらなきゃならねえこともある」ということを身をもって教え，自分を学校へもどすために，動かない足に無理をして二十メートルを歩きぬくという賭けに勝とうとしている源ジイの必死の姿に「涙」を流した。

問八＜文章内容＞雄吾は，源ジイが身をもって教えてくれた「大人だってみんな同じように」バカらしいと思いながらも「どこかで無理して，まわりに調子をあわせてるんだ」ということを理解し，今，「窓の外に広がるひとつひとつの建物に，それぞれの暮らし」を営んでいる人々もみんな，今の自分と同じようにつらいことを抱えていることに気づいた。

問九＜心情＞雄吾は，源ジイが体力の限りを尽くして賭けに勝つという説得にこたえ，ついに「約束だから。学校にはいく」と言った。そのこたえに満足した源ジイは，「競馬の必勝法」を教えると冗談を言うことで，雄吾に自分が元気であることを示し，心配をかけまいとした。

問十＜主題＞源ジイは，「人間，どんなにバカらしくても，やらなきゃならねえこともある」ということを雄吾に伝えたかったので，体力の限界を尽くして賭けに勝とうとしたのである。

三 〔古文の読解―説話〕出典：『古今著聞集』巻第十六，五二四。

≪現代語訳≫同じ守覚親王は，随身の中臣近武の袴のつけ方を気に入って心にとどめておられたが，どのような行事のときであったのだろうか，殿上童をご一緒にお連れになることがあったときに，近武をお呼びになって，「お前の袴のつけ方を，私は格別にお気に召している。この童にそのとおりに着せてみなさい」とおっしゃったところ，近武は，お聞き申し上げて，すぐにその童の身支度を整える場所へ行った。まず酒をもらえるように頼んで言ったことには，大きな椀で酒を五杯お飲みなさい，そのあと高枕を使ってしばらく寝ろということを言ったので，童も酒の飲める者であったのであろう，立派に言ったとおりに酒を飲んで寝た。しばらくたって，童を起こして装束をきちんと着せると童は袴の前後を荒っぽくむしり取って，袴は力を入れて強く引き広げられて，きれいな装束は散々な有様になってしまった。守覚親王はそれをご覧になって，「これはどうしたことか」とお尋ねなさったところ，近武が申し上げたことには，「つまりこの道理なのでございますよ。身のこなしがきちんとしておりますと，親王様のお目にも袴のつけ方が良く見え申し上げるのでございます。この童は作法が身についていない者であって，このように私の立ち居振る舞いにも似ておりませんから，どのようにきれいに袴を着せたところでこうして乱れるのは仕方がないことでございます」と申し上げたので，まったくもっともなことで，そのままこのご命令はないことになって済んでしまった。

問一＜古文の内容理解＞a．「同じ御室」が近武をお呼びになったのである。　b．近武が童に，酒を五杯飲んでしばらく寝るように言ったのである。

問二＜古文の内容理解＞近武は，自分の着付けが立派に見えるのは立ち居振る舞いの作法が身についているからで，作法の身についていない童に自分と同じように着付けをしても，立派には見えないし，すぐに着崩れてしまうことを，御室に理解させたかった。そこで近武は，童に酒を飲ませ，袴をきちんとつけることができない状態にして，それを証明しようとした。

問三＜古文の内容理解＞近武は，御室に「こはいかなるやうぞ」と問われ，「この定にこそつかうまつり候へ～力及び候はぬ事なり」と答えた。

問四＜現代語訳＞「さて」は，そうして，そのままで，という意味。「やみにけり」は，済んでしまった，という意味。

問五＜古文の内容理解＞御室は，近武の袴のつけ方を気に入っていて，自分の上童に近武のような着付けをしてくれるよう頼んだ。だが，近武は，袴の着こなしは，自分のように立ち居振る舞いの作法が身についていなければできないと考えていたので，童に酒を飲ませて立ち居振る舞いを乱れさせ，御室の依頼が無意味であることを示そうとした。

四 〔国語の知識〕

問一．ア＜ことばの単位＞1は「今後／成人年齢は／十八歳に／引き下げられるかも／しれない」で五文節。2は「小学校の／敷地内に／地域の／人々が／利用／できる／コミュニティハウスが／ある」で八文節。3は「昨年の／間に／日本に／上陸した／台風は／ふだんの／年に／比べて／少なかった」で九文節。4は「まだ／決めては／いないが／将来／医療の／仕事が／できると／よいと／思う」で九文節。　イ＜品詞＞「まだ」は，「いないが」と呼応している副詞一語で構成された文節である。

問二＜熟語の構成＞「読書」は，下の漢字が，上の漢字の目的，対象を表している熟語。ほかは，意味の似た漢字を重ねた熟語。

問三＜慣用句＞「口から先に生まれる」は，口の達者な者やおしゃべりな者をあざけっていうたとえ。「首をかしげる」は，疑問・不審のある様子をする，という意味。　「水をさす」は，うまくいっている間柄や物事の邪魔をする，という意味。　「歯に衣着せぬ」は，相手の感情や思惑を気にせず思ったまま言う，という意味。

問四＜漢詩の内容理解＞ごく若いころに家を離れ，年老いてから帰った。お国なまりは直っていないが，私の髪は白く薄くなった。子どもたちは私の顔など見知ってはいず，笑いながらおじさんはどこから来たの，ときく，という意味。

問五＜漢文の訓読＞二字以上返って読むときには，一，二点を付ける。一字のみ返って読むときは，レ点を付ける。「相與」の次に「乎舟中」を読むので，このあとに一点を施し，次に「沈藉」を読むので，この熟語に二点を施す。「東方之既白」の次に「知」を読むので，「東方之既白」に一点，「知」に二点を施し，次に打ち消しの「不」を読むので，これにレ点を施す。

問六＜漢文の内容理解＞A．夜，漢軍が四方でみんな楚の国の歌を歌うのを聞いて，項王はそれで非常に驚いて言った「漢軍はもはや楚国を手に入れたのか。なんと楚人が多いことか」と，という意味。　B．賈島は科挙の試験に出向いて都に着いた，ロバに乗って詩を作っていた，「僧は月明かりの下の門を推し開く」という文句を思いついたけれども，推すという語を敲くという語に作り直した方がいいか，と思い，手を使って推したり敲いたりのしぐさをし，なかなかどちらの字の方がいいか決まらなかったときに，うっかり長官の韓愈の行列に突き当たってしまった，という意味。「欲改推作敲」は，まず「推」を最初に読み，次にレ点の付いた「改」を読んで，「推を改めて」と読む。次に，レ点が付いているので，「敲」の直後に「作」を読んで，最後に二点の付いた「欲」を読み，「敲と作さんと欲し」と読む。